

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 2 月 25 日現在

機関番号：15401  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2008～2011  
 課題番号：20530135  
 研究課題名（和文）日露関係における対立から協調への転換についての総合的研究  
 研究課題名（英文）A comprehensive research about the change from the conflict to the cooperation between Russia and Japan  
 研究代表者  
 寺本 康俊（TERAMOTO YASUTOSHI）  
 広島大学・大学院社会科学部・教授  
 研究者番号：00172106

## 研究成果の概要（和文）：

日露戦争後、日露両国が対立から協調へと転換した理由について、次の様なことを実証した。第1に、日露戦争後、満州市場で米国との対立、ヨーロッパ情勢の緊迫化という国際関係の重要な変容の下で、林外相とイズヴォルスキー外相が、両国の国益を防御、増進するために、日露協定の成立のために力を尽くしたことである。第2に、当時のロシア新聞での対日外交政策に関する議論がロシア政治体制の民主化を促進したこと、またロシア人は新聞等の報道によって、日本社会との共通点を見出し、これまでの対日イメージを改めることになったことである。

## 研究成果の概要（英文）：

The study of the reasons of transformation in Russo-Japanese relations from the conflict to cooperation gave two major results: First, deep changes in the international relations, as conflict of Anglo-American interests with Japanese in Manchuria market and increasing tension in Europe, encouraged Foreign Ministers Hayashi and Isvolsky to make efforts towards Russo-Japanese cooperation (as a part of Entente) in order to defend and increase their national interests. Second, in Russia discussions about national foreign policy made a certain influence on the process of political democratization, as well as information published in mass media, as newspapers, made it possible to find certain similar points in Russian and Japanese social organization that ultimately improved image of Japan in Russia.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
20年度	1,500,000	450,000	1,950,000
21年度	800,000	240,000	1,040,000
22年度	500,000	150,000	650,000
23年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

## 研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：外交史、国際関係史、外交、世論、日露

## 1. 研究開始当初の背景

日露（ロ）関係は、冷戦期以来、北方領土問題に代表される解決困難な課題が存在し、日ロ間の外交関係は現在、冷却化、停滞しているが、その打開を図る政策を考案するとい

う現代的課題に貢献したいということが背景にあった。本研究は、日露戦争から第1次世界大戦までの時期に於いて、日露戦争を戦った日露両国がいかにして外交的・軍事的対立と相互不信を克服し、和解と協調関係を樹

立するに至ったのかという、日露両国の外交関係の変容について研究を行った。その研究のためには、日本だけの外交資料や見解の分析、検討では不十分であり、日露両国の世論、文化などの学際的な視点から、また日本だけではなく、ロシア、中国の研究者の協力を得て、日英米露中の関係5カ国の原資料を渉猟し、総合的かつ国際的な視野から研究に取り組むことを考えた。

## 2. 研究の目的

本研究は、日露戦争から第1次世界大戦までの時期に於いて、日露戦争を戦った日露両国がいかんにして外交的・軍事的対立を克服し、相互不信を払拭して、和解と協調関係を樹立するに至ったのかという、日露両国の外交関係の変容について研究を行うものである。その原因・背景、経緯、影響などの分析検討に関して、第1に、日露両国の外交史、軍事関係の研究やそれを取り巻く関係列強の国際関係だけではなく、両国の世論、文化などの学際的な視点から日露関係の変容、発展を研究した。第2に、日本の原資料だけではなく、ロシア、中国の研究者の協力を得て、日本、イギリス、ロシア、アメリカ、中国の関係5カ国の原資料を渉猟し、国際的な視野から研究することを企図するものである。第3に、冷戦期以来、北方領土問題など解決困難な課題を抱え、現在、冷却化、停滞している日露(ロ)間の外交関係の打開と克服、不信感の払拭に向けての考え方を提言するという現代的課題の考察も行った。

## 3. 研究の方法

寺本康俊は、国内で、林董、小村外相を中心に、その後の内田、石井外相のロシアとの外交交渉過程における外交政策を研究するため、外交史料館の林董関係文書、国会図書館憲政資料室の関連文書などの資料を渉猟した。海外では、イギリスの日露関係に対する見解を調査するために、イギリスの「国立公文書館」(National Archives)において、FO (Foreign Office) 文書、特に1905年以来、英国外交を担当し第1・2次日露協約や第3・4次日露協商当時の英国外相であったグレー(Sir Edward Grey)、駐日大使のマクドナルド(Sir Claude MacDonald)などの担当時期を中心に、また英本国と駐露大使、駐米大使などの交信を資料調査し、このような原資料の調査から、イギリスが満洲や日露両国の提携強化をいかに分析、検討していたかを実証的に調査、分析した。

アメリカの「国立公文書館」(National Archives)では、独米清協定案や高平・ルート協定締結時のルート(Elihu Root) 国務長官、第2次日露協商当時の米国国務長官ノックス(P.H.Knox)の外交担当時期の原資料を中心

に調査し、アメリカが満洲や国際関係で連携を一層強化し始めた日露関係をいかに見ていたかを分析した。

ユリア・ミハイロバは、日露戦争から第1次世界大戦までの日露関係の変容の中でも、特に日露両国における指導者と世論の変化について明らかにしようとした。日露両国間の信頼関係がどのようにして最終的に構築されたかという研究目的のため、第1に、両国間の協調を図ろうとする意識や見解が1905年から1916年の間にいかに増幅され、あるいは拒絶されたのか、というプロセスを論証し、第2に、それぞれ固有の立場に基づく政治的団体や個人についてどのようなものが存在したのか、という点を調査、分析した。そのための研究資料として、当時における日露両国の新聞、雑誌などマス・メディアを広く調査して研究した。

具体的には、日本側のロシア意識・認識の変化、マス・メディアによる日露外交関係の情報を分析するために、日本の新聞、雑誌資料を調査した。国会図書館新聞資料室で『報知新聞』、『時事新報』のマイクロフィルムを検索調査し、複写を行った。さらに、明治・大正期の日本新聞・雑誌について学術論文、著書を読覧、購入した。『読売新聞』、『太陽』は、ミハイロバがこれまでに購入した広島市立大学付属図書館に在庫するCD版の調査も継続した。

ロシア側では、「ロシア国民図書館」(Российская национальная библиотека)を訪問し、雑誌部で『Vestnik Evropy』『Russkoe bogatstvo』『Russkaia mysl』『Mir bozhii』『Vostochnoe obozrenie』『Niva』、新聞部では『Novoe vremia』『Rossia』、『Sank-Peterburgskie vedomosti』『Birzhevye vedomosti』などを広く調査した。

トルストグゾフ・セルゲイは、「ロシア帝国外交資料館」(Архив внешней политики Российской империи)に於いて、満洲に関しては、ф. (フォンド) 143— оп. (オピシ) 491、ф. 133— оп. 470 などについて調査し、資料的価値が非常に大きいこの外交上の原資料を調査した。とりわけ、「ロシア帝国外交資料館」の中に所蔵される膨大な資料の中から、その調査としてイズヴォルスキー、サゾノフ外相を中心とした日露協約、英露協約、日英同盟に関係する外交文書を、部分的ではあるが調査、資料収集した。

ニコライ・サモイロフは、サンクトペテルブルク歴史資料館(Центральный исторический архив)において、伊藤博文とココツォフ蔵相(Кокцов В.)との会談の外交上の目的、背景を調査し、当時の日露両国の外交的接近の状況、ロシア国内での日本に対する見解などを分析、検討した。

呂秀一は、日露戦争後における中国の中央

政府の日露両国への対応や中国の間島など満州地域の官憲などの日露両国への対応についての資料調査を、中国国内の档案馆などで行った。

#### 4. 研究成果

大要、次のような成果、結論が得られた。

(1) 日露英米4国の外交関係とその国際関係について：

①林の基本的な外交方針として志向したものが、「同盟政策」を推進することであり、しかもそれは、単なる日露両国の2国間交渉では日露関係の友好関係の成立の可能性は少なく、日露両国間の協調関係を成立、維持させる環境を形成するための外交的環境の成立が必要であり、その意味での重層的な国際協調体制を構築することであった。換言すれば、イギリスとの第1、2次日英同盟の駐英公使を務め、日英同盟の成立、強化に尽力し、同盟政策の重要性を痛感していた林こそが、日露戦争後に於いてロシアとの第1次日露協商の外務大臣として、困難な日露関係の修復に取り組むに最適な人物であった。

②イギリスの国立公文書館(NA)に於いて、外交文書(FO)の中で、FO405、410、800などを分析した結果、イギリス側の外交史料から、日本が日英同盟とは別に、日露協商の締結を考え始めた背景として、イギリスが、日露戦争後の日米関係の冷却、悪化に対して、次第に日英間の距離を置き始めたことを資料的に明確に裏付けることができた。1905年7月、ランズダウン外相は「イギリスは日米戦争に巻き込まれたくない」と明確に伝えていたが、1908年2月、グレー外相が日英同盟について「日本では日英同盟についての日英間の感情の乖離に戸惑い、日本では広く国民に支持されているが、イギリスではそうではない」と、日英間の認識の乖離について伝えていた。1908年、小村外相が「新法鉄道(満鉄平行線)問題は、満鉄にとって競争ではなく、死活問題である」と述べ、日本の国益にとって満鉄問題が「死活問題」であり、日本にとって譲歩できないものとして位置付けていた。

③英国国立公文書館の外交文書(FO)の中で、FO410、881などを分析した結果、ロシア政府が日英両国の提携強化への警戒感を示す一方で、特にロシアのイズヴォルスキー外相が日露協商に極めて積極的なアプローチを行い、英露協商の成立のためにはその前提として日露協商の成立が必要であり、両者の強い相互関連を指摘していたことが判明した。即ち、1905年、駐英ロシア大使が「日英同盟の改訂(1905.8)は、ロシア政府に衝撃を与えた」と率直に認めていた。1907年、イズヴォルスキー外相が「日露交渉が成功しな

い限り、英露交渉にも躊躇する」と、日露協商の成立が英露協商の成立の前提になることを明確に述べていた。即ち、長い間敵対関係にあった宿敵同士の日露両国が歩み寄り、日露戦争後における国際政治環境の激変を表現した英露協商の成立が、日露戦争を戦った日露両国の和解と協調の成否にかかっていたことを意味していたのである。1907年、イズヴォルスキー外相は重層的な国際協調体制の意義、価値を強調していた。つまり、「かつて、日英同盟、英露間協定があったが、日露戦争になった。日露協商はそれを防ぐ意味で真の価値がある」と、日露協商の成立する意味、価値について非常に重視していた。それは、1907年、イズヴォルスキー外相が「日露関係が満足な結果にならないと、英露協商の締結にも躊躇する。また、フランス政府に対しても、日露協商が成功という満足な結果にならないと、日本国債を引き受けるのは望ましくないと伝えた」と、本人自ら、日露協商の成立に強い熱意を表明し、日露協商の成立が英露協商成立の前提であることや、日露協商が成立しなければフランス政府に対して日本外債のパリ市場での引き受けを控えるように圧力をかけるという状況までに至った。

④日本外務省の外交記録「日露協商締結」などでも、こうした動きは確認でき、ロシア側のイズヴォルスキーの不安を分析、報告していたことが判明した。1907年、本野一郎駐露大使が林外相に宛てて、次のようなイズヴォルスキーの言明を伝えていた。「日露間で満足な平和協約が締結されなければ、英国との協商も無益となる虞がある」「露国国民は日本が近い将来、再び逆襲するとの疑念を抱いている」「平和を保つことができれば、より多くの譲歩をすることも敢えて憚らない」「日本との関係は、目下の懸案の解決だけでなく、日本との将来、永久的平和の基礎を確立することである」「ロシアの将来の長期的計画は、一方で日本との和睦を固くし、他方で英国との妥協を満足に締結することであり、これによって国力を休養し、ロシアの外交政策の中心を本領であるヨーロッパに移転することである」と明確に言明していた。このようなイズヴォルスキーの対日外交に対する不安の背景には、2年前のポーツマス講和条約が必ずしも日露間の安定した平和を規定していないという状況があった。

本野は、こうしたイズヴォルスキーの意向を踏まえて、(イズヴォルスキーの真意は)「日本との交誼を敦くし、極東の領土の保全にあり、極東永遠の長計と信じて、従来の侵略政策を棄てて、退守政策を取ることを決心した」、(イズヴォルスキーは)「日露協商が日露間の永遠平和なる目的で成立すれば、自分はいつ外相を辞めても良い」とまで率直に

自分の考えを披歴していたことを日本に報告していた。

林外相も、「日本政府はフランス公債募集を希望したが、ロシア政府がフランス政府に日本の態度に不安がなくなるまで遷延することを希望している」と述べ、上記のイギリス側資料で発見したところの、ロシア政府がフランス政府に日本外債募集について圧力を加えていることを確認していた。

その一方、1912年、桂首相はマクドナルド大使に対し「英露協商、英仏協商、日露協商があるのは、日英同盟のおかげである」と述べ、日露協商を含む重層的な国際協調体制の具現化であった3国協商体制の基盤となった日英同盟を高く評価していた。

⑤当時のアメリカ政府の日露両国に対する分析について、アメリカの国立公文書館（NA）に於いて、RG59などの外交文書を分析、検討した。

（日露協商の分析について）「ロシアは満州の現状維持を望み、国民の対日再戦を抑え込み、日露協商を締結した」「最近のロシアは、侵略的でなくなっている一方、日本の方はアジア大陸の方へ膨張の要請が強い。

ロシアの主目的は予防的なものである」

⑥ロシア側の外交資料でも裏付けられた。イズヴォルスキーが外相に就任して以後、対日接近政策の傾向が強くなった。ロシア側で、日本の新聞が「イズボルスキー氏が外相に任命された後、状態が一举が変わった。彼が日本と接近政策をとり、これをバフメーテフ氏が公布した」と伝えていることが報告されている。

林董が外相に任命された際、バフメーテフ駐日大使が最初の会談を行っていた後に報告していた。「彼が最初の会談では雄弁さと多分に誠実な言葉で自分の信念を表し、両国の国民と国益のため相互信頼と経済協力に基づく接近をさらに強める必要があるといった。」この背景には、経済協力、即ち、貿易と漁業を意味するものがあった。

イズヴォルスキーは、かつての駐日露国公使時代に、イギリスが日露関係に与えた影響についてこう述べた。「私の考えでは、日露関係の鍵はここ（東京）ではなく、ロンドンにあり、そして日露協定がどんなものであっても、セント・ジェームズ政府の承知、あるいは同意、場合によっては参加がなければ不可能である（成立しない）」と述べ、日露間におけるイギリスの存在の大きさも指摘していた。

⑦以上のように、外交面では、第1に、日露戦争後、満州市場に乗り込むアメリカとの対立という極東国際関係と欧州国際政治の再焦点化という国際関係の変容の下で、日露による満州分割という両国の「国益」の防御、増進が重視され、接近したという事情があった。第2に、そうした国際状況の中で、ロシア、特にイズヴォルスキーは、日露協商の成

立を強く要望し、そのためには、イギリス対しては英露協商の成立の可否が日露協商の可否にかかっていること、日露戦後の満州経営で苦しい日本に対しては、パリでの外債募集を働きかけているフランスに対してそれが日露協商の成立にかかり、その成立まで外債募集を受けること控えることをフランス側に働きかけていたという状況があった。また、イギリスのグレー外相もこうしたロシア側の事情を理解、同意したのであった。つまり、日露戦争後、極東、ヨーロッパ情勢の勢力関係の変化の中で、ロシアが極東での国益の維持、独逸両国などのヨーロッパでの情勢変化への対応に迫られた結果、日本とイギリスとの協調という道を選ばざるを得なくなり、その切迫した状況をイズヴォルスキー外相が日本側、イギリス側に躊躇することなく披歴していたことを資料的に実証できた。

（2）ロシアの世論の変容について分析：当時の日露両国の新聞を調査した結果、次のような成果があった。

①新聞間の議論のためロシア政府は交渉の過程及び日露関係が絡んだ問題について世論に説明することを余儀なくさせた。また1908年2月ロシア外相イズヴォルスキーは議会（ドゥーマ）で日本に対するロシア外交政策について演説し、議員はこの政策を議論した。このようにしてロシア歴史上初めて世論に配慮して外交政策が遂行されたのである。それは世論の業績、ロシア政治体制の民主化として評価することができた。

世論を媒介として、社会の要請は政府に届くことになった。当時のメディアは1906～1907年の日露関係を動かした一要因だった。それを具体的に理解するために、まず日露戦争後、日露関係が新聞でどのように議論されたか、その議論が日本に対するロシア外交政策にどのような影響を与えたかという問題を検討した。『ノーヴォエ・ヴレーミャ』は戦争前と同じように極東におけるロシアの利権確立を重視した。その一方、『レーチ』は、戦争後の新しい勢力バランスを認めた。その議論は、政府に交渉の過程を説明することを余儀無くさせた。『デイリー・テレグラフ』紙のペテルブルク駐在の通信員 E. デイロンの論文は日露交渉に大きな影響を与えた。新聞は、かなり正確に交渉を描写した。賢明な読者は、極東における新しい状況と勢力バランスを理解するようになった。新聞間の論争はロシア外務省が新たな政策を取るための環境を整えたのである。

②日露交渉が新聞に掲載されることによって日本という国自体にも関心が向けられた。1907年の日露協商の締結後、日本に特派員が派遣されたのは、その一部である。その中には参謀本部の将校であり、東洋学院の聴講生コースを卒業したヴァシーリー・クリヴェンコ、作家兼記者のマリヤ・ゴリヤチコフスカヤ、サン

クトペテルブルク通信社の最初の対日特派員であり、後に有名な日本学者になる D.M. ポズドネーフがいた。また、“Japonicus”のペンネームの下で『ノーヴォエ・ヴレーミャ』に日本政治や社会問題についていくつかの記事が掲載された。こうして、ロシア人は日本社会がいかに機能的に組織されているかに驚き、その成功の謎を解こうとした。その答えとして、日本臣民の統一性、義務に対する責任感に注目した。しかし、同時にロシア人は日本社会とロシア社会の間に共通点も発見した。それは議員が操り人形であること、社会主義・労働運動が発展していることであった。また、両国の帝国主義政策は多くの共通点を持ち、ロシアと日本は共通の利益があることを見出した。その意識は「エキゾチックな日本」、あるいは「敵対的な日本」のイメージを薄め、日本とロシアを同等の国として見ることを可能にした。

(3) 以上のように、日露関係の融和、協調についての歴史的、総合的研究を基礎にして、現在、解決困難な問題を抱え冷却化している日ロ関係を打開するために、日ロ両国の外交政策に解決策を提示する現代的課題について検討を行った。その結果、当時、日露両国が接近できたのは、第1に、日露戦争後に、欧米列強に対抗して、満州や朝鮮半島をめぐる日露両国が接近し、協調しなければならないという「国益」の合致があったということである。それは、現代の日ロ関係で考えれば、先ず、日ロ両国の協調は、国際政治上のゼロ・サムゲームでは成り立たず、ある程度、相互の譲歩を意味するウィン・ウインの関係が求められる。両国の背景にはそれぞれの国内世論があるわけであり、政治・外交指導者は一方的な譲歩は不可能な事情を理解する必要がある。第2に、日露戦争後の国際環境の激変があったとこと、極東の戦争で敗北したロシアは、戦後、方向転換して、再び、バルカン半島を中心とする中東欧に焦点を移した一方、日本は南満州市場を巡って門戸開放を迫るアメリカやそれを指示するイギリスと激しく対立することになった。こうした国際環境の下では、当然の帰結として、日露両国が接近する外的条件が整ったのである。今後、日本の国力の相対的低下、中国の国力の台頭、日米間・米中間の不安定で予測不可能な関係、中東の政局不安定などがもたらすことを勘案すれば、重層的な国際協調関係は当然、必要とされるであろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 17 件)

1. 呂秀一, 「日露戦争以後における日本の『帝国国防方針』と満州」『延辺大学学报』2012年第1期, 141-144 頁, 査読あり。

2. Yulia Mikhailova, “Representations of Japan and Russian-Japanese Relations in Russian Newspapers”, *Acta Slavica Iaponica*, 2011, no. 30, pp. 43-62, 査読あり。

3. Yulia Mikhailova, “Премьер-Министр Японии Коидзуми Дзюньбитиро в политической карикатуре: к вопросу об особенностях современной японской карикатуры” (「日本政治マンガにおける小泉純一郎の表象：現代日本政治マンガの特徴」), *Письменные памятники Востока* (『東洋古文書』) 2011 年 14 卷 1 号, 161-178 頁, 査読あり。

4. Yulia Mikhailova, “Познать Японию чрезвычайно сложно”: Дмитрий Позднеев о Японии и русско-японских отношениях” (「『日本は理解しにくい国である』: ドミートリー・ポズドネーフが見た日本と日露関係についての考え方」),

*Известия Восточного Института ДВГУ* (『極東国立大学属東洋研究院広報誌』) 2010 年 16 卷 164-179 頁, 査読あり。

5. トルストグゾフ・セルゲイ「日露戦争後の日露関係回復についての一考察」『東アジア研究』(大阪経済法科大学) 第 54 号, 2010 年 12 月, 47-60 頁, 査読あり。

6. Yulia Mikhailova, “Россия и Япония: образы и репрезентации” (「ロシアと日本: イメージと表象」), *Знакомьтесь, Япония* (『日本の紹介』) 2009 年 50 卷 34-42 頁, 査読あり。

7. Yulia Mikhailova, “Второй директор Восточного Института Д.М.Позднеев как ученый и журналист” (「学者と記者としての東洋研究院の第二次所長 D.M.ポズドネーフ」) A. ドイボフスキー編 『ロシアの極東における日本学の行方』大阪 ドラゴン印刷 2009 年 67-80 頁, 査読あり。

8. Сергей Толстогузов, Внешняя политика кабинета Хатояма и идея Восточноазиатского сообщества. (「鳩山内閣の外交と東アジア共同体の理念」)

*Ойкумена (Ekumene)*, Vladivostok, 2009 年, No. 4, pp. 16 - 23, 査読あり。

9. Николай А.Самойлов, Visits of Chinese and Japanese Diplomatic Missions to Russia in the 3d quarter of the 19<sup>th</sup> century: Communication Code of Sociocultural Interaction., *Vestnik Sankt-Peterburgskogo universiteta*, 2009, Vol.13, No.1, pp. 3-12. Vladivostok, 査読あり。

10. Сергей Толстогузов, Российско-японские отношения и мировая политика. 1905-1907 гг., (「日露関係と国際政治. 1905-1907」) *Voprosy istorii*, Москва, 2008 年 9 月 (No.9) pp. 17-28, 査読あり。

り。

〔学会発表〕(計 10 件)

1. Yulia Mikhailova, Япония и русско-японские отношения в изображении российских газет в 1906-1910 гг. (「1906 年～1910 年のロシア新聞に見る日本と日露関係」), 14-я Конференция «История и культура Японии», Москва, РГГУ, 13-15 февраля 2012 г. (「日本の歴史と文化」第 14 回学会,モスクワ人文科学大学,2012 年 2 月 13-15 日),ロシア。

2. Yulia Mikhailova, Beyond Diplomacy and Politics: Images in Russo-Japanese Relations, Paper presented at International Council for Central and East European Studies VIII World Congress, 2010, Stockholm, スウェーデン.

3. Yulia Mikhailova, From War to Peace: Russo-Japanese Relations in Mass Media (1905-1908), Paper presented at the 12th International Conference of European Association for Japanese Studies, 2008, Salento, イタリア.

〔図書〕(計 6 件)

1. Yulia Mikhailova, “Memory, Identity and Images of “Other”: Japanese POWS in the Soviet Union” , in Carol Rinnert, Omar Farouk, Inoue Yasuhiro (eds.), *Hiroshima and Peace*, Hiroshima City University Faculty of International Studies book series, Hiroshima: Keisuisha, 2010, pp. 164-179..

2. ユリア・ミハイロバ, 「日露戦争後のロシア新聞に見る日露関係と日本 (1906-1910 年)」中村喜和・長縄光男・ピョートル・ポダルコ編著 『異教に生きる。来日ロシアの足跡 V』成文社 2010 年 75-92 頁。

3. Yulia Mikhailova, “Японская политическая карикатура периода Мэйдзи: становление канона ” (「明治時代における日本政治漫画：規範の形成」) *Японская мозаика* (『日本のモザイク』)

Санкт-Петербург: Гиперион (ロシア・サンクトペテルブルク:ギペリオン) 2009 年,149-169 頁。

4. Yulia Mikhailova, “Japan's Place in Russian and Soviet National Identity—from Port Arthur to Khaikhin-gol” , Yulia Mikhailova and M. William Steele (eds.), *Japan and Russia. Three Centuries of Mutual Images*. Folkestone: Global Oriental, 2008, p.71-90.

5. 寺本康俊, Japanese Diplomacy Before and After the War: The Turning Point on the Road to the Pacific War, *The Treaty of Portsmouth and Its Legacies*, edited by Steven Ericson and Allen Hockley, Dartmouth College Press, Hanover NH USA and London UK, 2008. pp.24-40.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺本 康俊 (Teramoto Yasutoshi)

広島大学・大学院社会科学部・教授

研究者番号：00172106

### (2) 研究分担者 (H23：連携研究者)

ユリア・ミハイロバ (Yulia Mikhailova)

広島市立大学・国際学部・教授

研究者番号：00285420

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

①セルゲイ・トルストグゾフ (Сергей Толстогузов: 広島大学・総合科学部・非常勤講師)

②ニコライ・サモイロフ (Николай А. Самойлов: サンクトペテルブルク国立大学准教授)

③呂秀一 (大連大学・東北アジア研究院・准教授)